

## 近世後期天草郡高浜村における疱瘡流行と迫・家への影響

東 昇

はじめに

本稿は、近世における感染症の疱瘡（天然痘）流行が村社会・地域に与えた影響について、村の中の村組である迫や家・人に焦点をあて、その実態をあきらかにする。対象とするのは近世後期、文化年間を中心とした幕府領の肥後国天草郡高浜村である。文化年間は、文化二年（一八〇五）に天草崩れ、同五年オロシヤ一件、同一〇年に島原藩預から長崎代官直轄支配へ変化した時期である。高浜村は、庄屋を上田家が世襲し、年寄・百姓代が各迫から選ばれ村政を行っており、対象とする史料群は上田家文書である。<sup>(1)</sup>

近世の疱瘡については、香西豊子氏が近年、種痘を基軸に疱瘡の病像・医説・政治の視点から総体的にまとめられている。<sup>(2)</sup> そのなかで「無痘地」の一つとして野田泉光院・村井琴山の記述から、天草を取り上げている。そして無痘地の習俗として日本各地の事例から「遠慮」「送棄て」「逃散」の三類型を提示している。また、地域別、特に九州地域の種痘の状況をまとめたものとして、青木歳幸氏により天草が立項されており前稿の内容を一部紹介している。<sup>(3)</sup>

さらに近世日本の疱瘡流行の実態に関して、渡辺理絵氏は出羽国中

津川郷の疱瘡伝播過程を分析している。<sup>(4)</sup> 中津川郷の罹患者の大半は一〇歳以下であり、近世農村地域で疱瘡流行の周期性があったことを示唆した。そして、子供のモビリティの低さから伝播速度は緩慢であったとする。また川口洋氏は、武蔵国多摩郡における牛痘種痘法の導入・普及過程と疱瘡による子供の死亡数の変化について考察している。<sup>(5)</sup> 多摩郡では、嘉永三年（一八五〇）に牛痘種痘法が導入され普及し、疱瘡による子供の死亡数が急速に減少したと指摘する。

これまで天草の疱瘡について、二つの研究をまとめたが、本稿を分析するにあたりその概略を示す。まず近世中後期における疱瘡対策に焦点をあて、種痘以前の山小屋や他国養生の変遷を分析した。<sup>(6)</sup> 近世の天草では、疱瘡対策として、①忌み嫌う意識を形成することで、その侵入を阻止。②疱瘡が蔓延した際には、山小屋や他国養生で病人を隔離し医師を派遣、村内、郡内から食糧などの支援を得た。③一九世紀中期に入ると、村における疱瘡関係の費用負担が問題となり、天保五年（一八三四）には郡内で近代の病院的発想の請込養生が構想。一村だけでは解決できず郡全体の行政課題となった。④しかし嘉永二年（一八四九）、ヨーロッパから牛痘による種痘が到来、種痘普及に

より主要な対策であった村での山小屋送り、他国養生が廃止となり、自宅養生に変化した。

つぎに、高浜村の文化四・五年の疱瘡流行を事例として、庄屋日記に蓄積された地域情報の内容をとりあげた。<sup>(7)</sup> 情報収集の視点から、疱瘡流行では文書より圧倒的に日記の情報が多く、計三三点のうち日記に写された文書二七件、現存文書は六点である。写された文書は、富岡役所をはじめ大江大庄屋宛であり、高浜村・上田家が行政として連携した人々との村行政の記録といえる。日記の文書記録は重要であり、単体の文書のみでは、疱瘡の経過、対策など村の行政の動きはとらえることはできない。そして、情報の分析として、日記に疱瘡死者数と薬品の投与の割合など具体的な数字を掲げた上で、死者割合は低く効果があったとする。綿密な疱瘡対策を実施し日記に記録したことにより、高浜村はその後も疱瘡が流行するが、人口減少に至らなかったとまとめた。そのほか、近世全体の疱瘡流行、隣村崎津村の疱瘡による人口減少などについては、村山聡氏とともに分析している。<sup>(8)</sup>

このような先行研究、前稿での分析を踏まえて本稿では、近世における疱瘡流行が社会に与えた影響と実態についてあきらかにする。これまで主たる分析対象とした、高浜村の文化四・五年の疱瘡流行は、村の疱瘡対策や人口増加など村の行政に影響を与えたと論じた。しかし、村の中の村組である迫や、そこに暮らす個別の家や人に対する影響は分析できていない。そこで、本稿では、迫や家・人に焦点をあて、1文化四・五年の疱瘡流行期に作成された資料を精査し、迫全戸の状況や難儀者などを明らかにし、2切込・遠慮・他国養生の対象となっ

た家や人、支援物資の提供者、文化六・七年疱瘡流行の実態、3宗門改帳からみた疱瘡死による家・家族への影響を解明したい。

## 1 文化四・五年の疱瘡流行

### 1-1 疱瘡流行の概要と作成文書

まず、諏訪迫が発端であり中心地となった、文化四・五年の疱瘡流行の概要について述べる。村の村組である迫（通・組）は幕末には一四あり、今回対象とする諏訪は、村の中心である元・中向・宮ノ前から高浜川を隔てた村の北に位置する（図1）。<sup>(9)</sup> 後述する史料②から、全戸一二三軒・五四〇人の村内でも規模の大きな迫であった。

文化四年二月一二日、諏訪迫の慶助が二月二八日疱瘡で死亡、関係者二〇人ほどが罹患し、一四日外平の山小屋へ隔離した。一六日病人は六一人となり医師宮田賢毓を派遣し治療にあたらせる。二五日病人八〇人、看病人一二〇人、除小屋（感染疑者の収容施設）一〇一人、医者・賄方・山小屋見ケメ三人と、山小屋には計三三〇人程の人数がいた。文化五年正月二六日病人一五一人、死亡六一人（実数六三人）（四〇％）であったが一旦収束する。

しかし二月一七日～三月七日疱瘡が再発（第二波）、山小屋一五人、死亡二二人（八〇％）となる。四月七～二五日疱瘡が再々発（第三波）、船にて他国養生一七人、死四人（二四％）。五月二三日最後の患者が出て山小屋閉鎖、六月二四日他国養生者が帰国、疱瘡流行の終焉となる。発端となる慶助を含めて合計すると、家六七軒、病人一八四人、死八一人（四四％）の被害となった。文化四年段階、高浜村の家

図1 高浜村迫図



凡例：「諏訪111」－迫名と家数：慶応2年3月「五人組合家別帳」（上田家文書7-104）、その他は関連地名、図は「天草島高浜村海邊地勢要図」（檜垣文庫12-8-1）を参考に作成

数五四二軒、人口三三七〇人（男一六二五人、女一七四五人）、一軒あたり六・二二人であった。<sup>(10)</sup> 村全体では家数の一二％、人口の五％が病人、二％が死亡している。

つぎに疱瘡関連の史料について、前稿で分析した日記の記事・文書写中心ではなく、つぎの独立して作成された文書を対象とする。<sup>(11)</sup>

①「諏訪通疱瘡人山小屋入并除小屋入人数書」文化四年

②「諏訪之通家数人高相改疱瘡病人仕訳帳并外場所病人共」文化

四年二月二十八日

③「諏訪之通疱瘡相煩極難儀者」

④「諏訪之通疱瘡病人山小屋入并除小屋入書立帳」文化五年正月

二六日

⑤「疱瘡病人数御届申上候小前書立帳」文化五年五月

この五点の内、①③⑤の上田家文書所蔵分は知られていたが、②④の檜垣文庫所蔵分も元は同じ上田家文書であり統合して分析を行う。文書は作成順に並べており、③以外の文書は、いずれも高浜村庄屋から富岡役所、会所詰大庄屋などに提出した控に、経過などを追記したものといえる。これらの史料を詳細に分析することで、文化四・五年の疱瘡流行の特徴や実態をあきらかにできる。なお作成の経緯、過程などは、当時の庄屋上田宜珍（源作）の日記を利用している。<sup>(12)</sup>

1―2 感染拡大の発端・経緯と初動

最初にまとめられた①「諏訪通疱瘡人山小屋入并除小屋入人数書」は、まず「家頭、●作兵衛、三十三、メ壺人」各人の名前・続柄・年齢、

家別の人数、死亡者には●が記される。各家の順番は文化四年の宗門改帳とほぼ同じである。<sup>(13)</sup> 続いて患者数などの合計内訳として、疱瘡病人が三六軒、八〇人、看病人一二〇人、死者一六人、残六四人が山小屋で養生し、他一〇一人と記す。死者の内六人は「至而重症二而山入不仕候内相果候罷在候分」、一〇人は「山小屋にて養生不相叶昨廿四日迄相果候分」と山入の前後で区分している。また他一〇一人は除小屋入の「疱瘡煩出候家内未煩付不申候分」と濃厚接触の可能性の高い病人の家族である。除小屋の者は発病すると山小屋へ移された。

この文書は、表紙に「卯十二月十四日山入、同廿三日迄改」とあるように、一二月一四日～二三日の情報をもとめている。一二月二五日日記にも、ほぼ同文が写されており、「一明日富岡江作七并武助罷出候ニ付、諏訪疱瘡一件是迄之成行御届申上候積り相改候処、左之通」「右之通帳面ニ書立持参候、右之通大江へも又々相達候」とあり、この文書は富岡へ届け出た帳面であった。日記には、合計の後に「惣メ三百七人、外ニ医師七人并賄方七人山小屋見ケメ七人、合三百四十二人」と、医師など関係者も記される。

この後、これまでの疱瘡拡大と対策の「成行」、経緯を述べている。内容は、諏訪之通の百姓から疱瘡が発生し、海辺の外平という以前から山入している場所に山小屋を建てた。今回、大勢一同に煩い重傷者も多いので、当村の医者宮田賢毓に治療を依頼した。いずれも貧家なので、薬を与え救済するように看病人へ伝え養生させており、また山小屋見ケメを派遣し諸事手拔かりないようにしている、とある。

続いて一つ書きで、①当時山小屋にいた病人等三〇〇人の糧米・薪

の持運人足三〇人がおり、毎日山通いしている。この人足は帰りに村の白洲の外海、東シナ海側で身を清め、一夜宮籠して村へ帰るが、寒中なので疲労が激しい。患者が増加した場合には、この人足を近村へ依頼したい。②人数分の糧米・薪入用は患者の親類に申し付けたが、極難儀者の分は村方より手当している。また諏訪中は村方との出入りが禁じられ、貧家の糧米・薪が不足しており同じく村方が手当している。③高浜村の社人家内が疱瘡となり山小屋入したので、大江村社人播磨に一六日～二一日祈祷を依頼した。④村の庵でも一七日理趣文経を転読した。⑤一九日富岡の明星院が来村し疱瘡退散祈祷の申し出があったので依頼した、とある。疱瘡病人の支援、貧者支援、宗教による対策など現状を説明している。最後に「除小屋入之分」では、「五左衛門家内三人」と、除小屋へ移った一八家各家の人数が列記される。

1-3 諏訪迫全戸調査と付添者

②「諏訪之通家数人高相改疱瘡病人仕訳帳并外場所病人共」は、諏訪全体および諏訪以外の病人に関して、家別の人数を集計報告している。この文書にはつぎのように、各家別の家頭名、男女・家内人数、疱瘡病人・除小屋入の人数が記される。

一家内式人内男七人 家頭

女七人 弁作

(中略)

一同 九人内男四人 同



女五人 作兵衛

内疱瘡病人壱人

除小屋入五人

メ三人出違無難

最初の弁作家は疱瘡病人はおらず、つぎの作兵衛家は九人の内、疱瘡病人は一人、感染の疑いのある除小屋入は五人、残りの三人は当時家から出ており感染の疑いはないとされている。特に発端となった慶助家では、「此家頭慶助最初何病共不相分相果候処、病中并葬式ニ立寄候者大勢一同ニ疱瘡煩付候事ニ御座候」と、最初の経緯が記されている。家の区分は、3―1で後述するが宗門改帳は家頭別の把握であり、ここでは家頭と別宅人に区別されている。感染症の疱瘡を把握するため、より小さな単位といえる別宅人まで把握した。

諏訪でまず小計され、全戸一二二軒・五四〇人、内疱瘡病人七五人、除小屋入九八人となる。続いて西平、浜、松下迫は病人のいる家のみ五軒・二七人（病人五人、除小屋入二〇人）である。松下伊勢蔵家三人の内病人は一人のみであるが、これは重内宅という別の家で感染したので、家内の者は「無難」という判断の結果である。除小屋入は病人の家族ならばすべて該当するのではなく、実際に接触しているかどうか確認した上で判断していることがわかる。

疱瘡病人は総計三六軒・八〇人とあり、この人数は一昨日提出した「小前帳面」Ⅱ①「諏訪通疱瘡人山小屋入并除小屋入人数書」の通りであるが、死者は一六人から三人増加したと注記する。同じく除小屋

入は一一八人と一七人増加した。その後、二五日に除小屋入四人が疱瘡発症のため山小屋へ、二七日諏訪から二人病人が出て山小屋入したので病人は計八六人になった追記している。

総計の後に「猶又相替儀者其時々御届可申上候」と、刻々と変化する疱瘡流行に対応して随時連絡するとし、この文書は十二月二十八日付で上田源作から代官渡部良介、小川仁兵衛両名に宛てた届となっている。この史料の提出については、十二月二七日の日記に、「一明日富岡江以飛脚御届出申上候筈、諏訪之通家数人高相改疱瘡病人仕訳帳一冊并外場所病人共」、会所詰大庄屋宛「覚」には「一御代官様江差上候帳面 壱通」とあり、代官へ上申するよう依頼している。

最後に二九日医師宮田氏からの連絡として、二五―二七日の除小屋で疱瘡を発症し山小屋へ移った者一〇人の名前を列記し、つぎの付添者の記録が続く。

一子病付候而生身之母背負来、母病付候而生身之子付添来候もの  
拾七人

万作 むめ 福松 市太 乙松 辰 半 たつ きく よね  
むめ ため 善次郎 とめ たぬ 幸十妻 こめ  
右ノ内むめ・ため兩人廿七日今病付

これは疱瘡の子供を背負ってきた母親、疱瘡の母親に付き添った子供の名簿で、その内二人が二七日から疱瘡に罹患したという報告である。名前の内、二文字以上の漢字名を男とすると残り二人は女性と

なり、付添者の傾向が判明する。

この史料の内、後半の疱瘡病人数以降の情報は、二月二十九日の宜珍から大庄屋への報告を写した日記に記される。特に付添者の部分は、「二除小屋分子供付候而生身之母背負来、母病付候而生身之乳吞子供添来もの、当廿五日分同廿七日迄山小屋へ参候もの拾七人有之候由、右之内兩人廿七日病付候由」とあり詳しい。この記事によると、この病人への付添の実態は、二月二十五日から二十七日の三日間、除小屋から山小屋へ、合計一七人中、二人が二十七日に疱瘡に罹患したとある。報告の最後には「此人数定而不残相煩可申左候得者疱瘡病人百拾三人二相成申候、扱々大造之儀二相成甚心配仕申候、御察可被下候、何卒相治り候得かしと夫而已祈罷在申候」と記す。付添者の疱瘡未罹患者も合わせてすべて合計すると一三三人となり、大人数で心配であり、流行が収まるよう祈るのみと心情を吐露している。付添者は看病人と同じく疱瘡既罹患者の可能性もあるが、急激な感染者の増加に、「施薬二仕、賢毓差遣申候、其外養生方山小屋壁やね一切為見ケメ壹人差越」して、即座に対応してきた宜珍も苦勞している様子がうかがえる。

#### 1-4 第一波の状況

③「諏訪之通疱瘡病人山小屋入并除小屋入書立帳」は、二月十四日から正月二十六日までの集計であり、つぎのように疱瘡病人、死者の家族に区分され、各人の名前・続柄・年齢、山入と死亡月日、死亡者には●が記される。

#### 家頭

卯十二月十四日山入 ●作兵衛

同月十八日相果 去卯三十三

#### メ宅人

外二除小屋五人

まず諏訪で合計され、四二軒、病人一三八人（男五九、女七九人）、内五七人（男二二、女三五人）死亡、除小屋一〇六人とある。つぎに諏訪以外の濱・西平迫の病人が列記され、小計の後、総計五一軒、病人一五一（男六四、女八七人）、内六一人（男二四、女三七人）死亡、残九〇人（男四〇、女五〇人）、除小屋二九人とある。

その後、別筆にて二月二日付、宜珍から富岡役所宛「以書付御届申上御事」が写されている。病人数などほぼ同じであるが、四人が「初熱之内家内二而相果候分」、一四六人が「山小屋二而養生」、他に一人が「二月二日煩付山小屋遣候処、至而浅症二而全快仕候」、五七人が死亡し、九〇人が助命と詳しく記される。そして収束の経緯が記され、山小屋派遣の医師宮田も出身地の肥後国宇土郡砥江村へ帰り、残りの病人や除小屋の無難者は経過観察日数を経て村へ帰していると報告した。同日の日記にも同文が写されているが、最初の疱瘡病人部分に「去卯十二月十四日分当正月十九日迄相煩候分」の記載がある。また日記には同時に提出された村内からの疱瘡難渋者へ助合（支援）物資の一覧もあり、「右届書式通、替り人足分遣ス」とあることから、本来二通のまとまりであった。

そして二月に入って山入した諏訪の九人の名前・続柄・年齢が列記される。続いて他村、村内からの支援物資の一覧四件があり、七月九日に富岡に提出した「諏訪疱瘡一件救方届書」（文書名「以書付御届申上候事」と同じものである。五月に村中から集められた丁錢百四貫五百文も含まれており、日記と同時期に追記されたと考えられる。最後に疱瘡による生活困難者の一覧と思われる難儀者二十七人への物資の配分があり、「一麦壹斗五升、一錢貳百五拾匁 兵吉」と各人別に麦や錢、塩、粃が配当されている。

#### 1-5 難儀者の把握と救

村内外からの支援物資は、一二月二七日の粃七俵、大島の小山和源次が最初であり、疱瘡病人の内、極難儀者への助合として送られた。正月二日に記された、一二月晦日作成の富岡役所への届（崎津魯道和尚他）にも、諏訪の疱瘡難儀者へ助合とある。四日には、諏訪は今回迫全体が切込となり難儀者がより困窮化し、近隣の迫である善角・元向中より家毎に唐芋五升づつ集め、それを八幡土手の番屋から諏訪へ渡すように申し付けている。これらの支援物資は、正月九日疱瘡病人の親類達を会所へ呼び寄せ配当案が伝えられた。味噌は近々山小屋へ送る、粃・麦は追って極難儀者へ配分すると申し聞かせた。

この極難儀者は、④「諏訪之通疱瘡相煩極難儀者」では、熊之助から傳三郎まで二〇人の名前が列記される。なかでも、熊之助・与作（三五郎事）・市五郎・虎松の四人には、粃・米の配分がある。この四人は、与作：二月一七日山入、熊之助・市五郎：二月二〇日、虎松：三月七

日と二月以降の第二波の感染者である。また只藏・太郎作・傳助・宅藏・伊与吉・佐助の六人には「跡」とつけられ、安五郎は女房とあり、家頭が死亡し残された家族と考えられる。③「諏訪之通疱瘡病人山小屋入并除小屋入書立帳」により、それぞれの死亡月日をみていくと、只藏：正月二三日・太郎作：正月二日・傳助：正月八日・伊与吉：正月二一日・安五郎：正月二三日となり、この記録が作成されたのは正月後半以降だとわかる。

宅藏は不明であるが、佐助は日記の記述から、諏訪ではなく内野迫の佐助と考えられる。三月七日「内野寺宇土左助後家倅亀吉疱瘡山入」とあり、佐助の後家の倅亀吉が疱瘡になり、山小屋入している。翌八日の記事によると、大河内迫の七平は、母（後家）に連れられた亀吉の病直しと思われるまじないを依頼された。亀吉の疱瘡が判明したため、大河内の迫中は七平に対して除小屋入を申し付けたが、七平の親類中は切込にしたいと会所へ申し出た。しかし迫中から除小屋入と指示されたので、従うよう申し付けたとある。疱瘡流行が収まった時期で、特に感染者の出ていない迫であったため、切込より厳しい措置となった。四月六日除小屋にいた佐助後家が疱瘡となり山小屋へ移した。そして五月二三日には、佐助家内の疱瘡快気の者が日数七七日目で「山出シ」となり、外平の山小屋から全員山を出たため「山被イ」として養吉他を派遣したとある。七七日目とは、三月七日の亀吉の疱瘡山入を起点にしており、佐助家が文化四年疱瘡流行の最終であったことがわかる。この文書は疱瘡に罹患した難儀者の記録であり、作成されたのは最後に罹患した左助後家亀吉の三月七日山入以降と推定できる。

## 1-6 第二波、第三波の状況

最後の⑤「疱瘡病人数御届申上候小前書立帳」は「但二月一七日分三月七日迄山小屋遣候分、四月四日分同廿五日迄他国江差遣分」とあるように、第二波の二月、第三波の四月の疱瘡病人を書き上げたものである。二月分は、つぎのように病人の家別に区分され、各人の名前・続柄・年齢、山入月日、快気（回復）と相果（死亡）の別、死亡者には●、家別の合計人数が記される。

## 家頭

二月一七日山入快気 三五郎 廿七

三五郎母

右同断快気 さん 六十四

同人女房

右同断相果 ● たつ 廿九

同人忰

右同断相果 ● 甚次郎 三ッ

メ四人

二月分で合計され、六軒、病人一五人（男八、女七人）、内二人（男六、女六人）死失、残三人快気助命、除小屋一〇人とある。

続いて四月分の「他国へ養生ニ遣候分」は、つぎのように病人の家別に区分され、各人の迫・名前・続柄・年齢、他国養生出発月日、加勢銭、除船・看病人数、死亡者には●、家別の合計人数が記される。

除船とは除小屋と同じく、感染の疑いのある家族を船に隔離する措置である。

## 諏訪久平娘

加勢銭七百目 ゆり八ッ

四月四日煩付船分他国へ養生ニ差遣申候

メ壹人

外二五人内男三人除船分遣 式人内男壹人看病

女二人

女壹人

四月分で合計し、一一軒、病人一七人（男七、女一〇人）、看病人二人、除船分遣一七人とある。この上に貼紙があり、病人の内五人（男一、女四人）死失、残二人助命が追記され、閏六月五日とある。日記の閏六月四日には富岡に送付した「疱瘡病人他国へ養生ニ差遣候分、死生仕訳帳 一冊」が記されており⑤はその控である。死亡の記録のある文書①③⑤は「死生仕訳」と記していたこともわかる。この日、同時に「御見取畑反別小前帳 一冊、疱瘡一件訳書付 一袋」を送っている。

最後に「覚」として、三月一八日隣村小田床村から米一俵、同村庄屋伊野又七郎から粳一俵、高浜村の丁銭百四貫五百文が記される。同日の日記に「一小田床伊野又七郎殿分、先達而拙者義、結構蒙仰候御祝儀ニ、御樽肴扇子御送被遣候、一粳壹俵并小田床村分米壹俵当村疱瘡難渋之者共へ、為助合被遣候ニ付直ニ会所へ相渡、夫々礼状遣ス」



とある。小田床村からの助合物資であり、会所へ送付されたことがわかる。丁銭は、四月分の他国養生者への支援金である。

以上の記述は、五月一九日日記にみえる「一疱瘡一件、左之通御届書上ル」の「以書付御届申上御事」一点、「御届申上御事」二点の文書写しと一致する。「以書付御届申上御事」は、先述の二月、四月分の合計人数を記した上で、次の疱瘡一件全体の総括的な内容を記す。

右者段々御届申上候通、当村諏訪之通ニ去冬今当正月中旬迄疱瘡病人大勢出来、於山小屋養生仕候二付、医師宮田賢育差遣置二月上旬迄療治方相済、跡病人も無御座候二付、同月十四日同人儀肥後宇土之様引取申候、然処同月十七日又々病人出来、山小屋江差遣、看病人斗付添養生仕候得者、書面之通拾五人之内拾式人死失二相成、漸三人助命仕候儀二而、甚悼敷事ニ奉存、其後四月四日今尚又病人出来候二付、村方相談仕、山小屋へ遣候而ハ右体死失人も多有之、殊ニ段々跡引も仕候事故、他国へ養生ニ差遣度申之候二付、則其後出来候分ハ他国江差遣申候、尤未罷帰不申候二付、此死失人且助命之人数并除船分參候者共煩有無之儀ハ未相分不申候得共、其以後於村方二者壹人も出来不仕無難ニ御座候間、最早相治候儀と奉存候二付、右之様子御届申上候、以上、

辰六月

右村庄屋上田源作

富岡御役所

この文書では、①第一波：去冬ノ正月、山小屋養生、宮田の療治、②第二波：二月一七日ノ、山小屋・看病人養生、③第三波：四月四日ノ、他国養生の概要が述べられている。第二波の宮田不在の中で死者が増加したため、第三波は他国養生が選択された。そのため、第二波まで詳細に把握していた病人の生死や除船の感染者の状況は不明とある。結論として、その後村方では疱瘡病人は発生せず、流行は収束したと判断している。

「御届申上御事」は小田床村の助合物資の受け取りと配当届と、つぎの村方の丁銭の届である。

御届申上御事

一丁銭百四貫五百文

高浜村

右者段々御届申上候通、当村疱瘡難渋之者共江諸方々為救方差出候品々配当仕候得共、元来難儀者共数多ニ而御座候二付何分行届不申、已拝借御願申上候筈ニ御座候処、右体之御厄介筋申上候儀恐多奉存、於村方種々取計仕漸凌方為仕候得共、他国へ養生ニ差遣候者共及難渋候二付、書面之銭高尚又村方今助合仕候、其外山入之節入用并山小屋見ケメ入用之分ハ、家別見懸わりニ仕相弁候様夫々取計仕候、依之此段御届申上候、以上

辰五月

右村庄屋上田源作

富岡御役所

村ではすでに疱瘡難渋者へ郡内各地からの救方物資を配当したが、難渋者が多く不足しており、拝借願も出している。この丁銭は他国養生者のために村方から集め、山入や山小屋見ケメ入用は村内で家割にするなど、村の自力救済策であったことがわかる。この他、「施薬ニ致候分并賢育老へ謝礼之訳、書付差上候様被仰聞、小川仁兵衛様迄御内分懸御目申候、則別紙扣有リ」とあり、薬代・医者への謝礼などの費用もまとめたことがわかる。

また、疱瘡関連の支出として、疱瘡死者への供養・布施代がある。四月二四日、疱瘡死者の供養を、高浜村隣峯庵の海運和尚が船で外平海岸へ行き執行し、長二間半・巾五寸・厚四寸の卒都婆に八十三霊の戒名を記し建てた。布施一五〇匁の内一〇〇目は発端となった慶助忤からの志、五〇匁は諏訪中亡者の家々から集め、その他は村方が支出した。供養に関して発端となった責任か、慶助の忤が三分二を支払っている。

文化四・五年の流行は、発端となる慶助を含めて合計すると、六七軒、病人一八四人、死八一人（病人の内四四％）の被害となった。④⑤の病人、死亡を五歳間隔の年齢別にまとめたものが表1・図2である。年齢別にみると、子供病と指摘されるように、若年層二～一五歳は二〇人代と多いが、それ以上の一六～五〇歳でも一〇人代と一程度の病人がいる。特に三六～四〇歳が前後の年齢より低いのは、3～3で後述する文化五年二月第二波の流行発端となった諏訪與作母が「三十拾四年已前疱瘡相煩」とあり、三四年以前の疱瘡流行の既罹患者が多く免疫があった可能性があるためである。死亡は五歳までと三一歳以

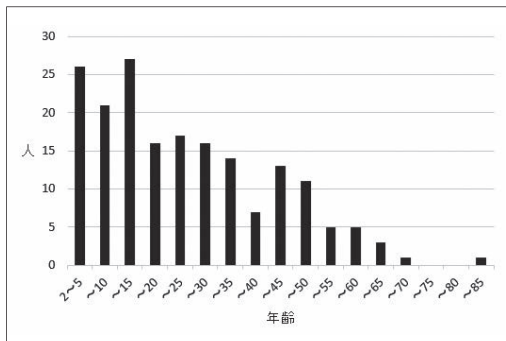


図2 文化4～5年疱瘡流行の年齢別病人数

表1 文化4～5年疱瘡流行の年齢別病人・死亡者数

年齢	病人	割合(全体)	死亡	割合(病人内)
2～5	26	14%	13	50%
～10	21	11%	7	33%
～15	27	15%	7	26%
～20	16	9%	4	25%
～25	17	9%	8	47%
～30	16	9%	4	25%
～35	14	8%	8	57%
～40	7	4%	5	71%
～45	13	7%	7	54%
～50	11	6%	7	64%
～55	5	3%	3	60%
～60	5	3%	5	100%
～65	3	2%	1	33%
～70	1	1%	1	100%
～75	—	—	—	—
～80	—	—	—	—
～85	1	1%	1	100%
不詳	1	1%	0	0%
合計	184		81	

「諏訪之通疱瘡病人山小屋入并除小屋入書立帳」(檜垣文庫 252-9)、  
「疱瘡病人数御届申上候小前書立帳」(上田家文書 5-279) からデータを抽出した。

上がほぼ五割を超えており、一方で少年・青年層の死亡率は低く、健康状態などの理由が考えられる。発端の慶助が五六歳であり、同年代の親類や関係者が多く、周辺世代へ感染が広がった。

## 2 疱瘡流行と迫・家・個人

### 2-1 切込と遠慮

これまで疱瘡関係文書で判明した疱瘡流行の実態が、当時を生きた人々にどのような影響を与えたのか。2では疱瘡流行による迫・家・個人への影響についてみていきたい。特に、迫内の居住地で実施される切込・遠慮の実態、流行中心地であった諏訪迫内の支援物資提供者の家族・経済状況、文化六・七年疱瘡拡大の発端をみていく。そしてこの流行で実施された他国養生、特に養生先の状況について分析する。文化期、疱瘡感染による隔離措置は、山小屋・除小屋・他国養生・切込・遠慮がある。山小屋・除小屋は1でみたように文書記録に多いが、切込・遠慮・他国養生は日記に登場する。まず二月一六日宜珍より大庄屋への届に、つぎのように記される。

一 浜中今諏訪慶助方へ出入素候人数、左之通切込置申

一 吉衛門・新左衛門・多助・才作・徳二郎・善兵衛・喜八・銀左

衛門・伯英・宇助・繁衛門かか・惣左衛門かか、松下左兵衛、

上河内作次郎・龍吉・三柙平・孫吉跡すへ、十七人

諏訪中八余迫と出入差止置申候

疱瘡流行の発端となった諏訪の慶助家へ出入りしていた、諏訪以外の迫、浜中を中心とし松下・上河内の接触可能性のある一七人が切込となった。そして、諏訪中は疱瘡流行地として、他の迫との出入りが差し止められ、迫全体が切込状態であった。正月四日にも「諏訪之通、此度切込候二付」とある。

前日の一五日、宜珍より大庄屋への届では、医者伯英は、以前、慶助の病中療治をしていたので、村方への出入を遠慮している。慶助は新左衛門の八田網の弁指で、同入方へ出入していた浜中からも悔等に参る者が多かったとある。伯英を含む浜中の者の接触機会が記されていた。

一九日に村の八幡宮御宝前で大江村の神主播磨が御鬺御上を行い、切込の家は五・七日見合せて家から出すように、諏訪中は御鬺が上らないので入念にするよう神託があった。実際には一〇日後の二六日、浜中・上河内・峯の切込した家々を祓、門明をした。

切込は門明とあることから蟄居・閉門に近い措置、遠慮は切込ほど厳しいものではなく、村方への出入を遠慮するように、当事者から訪問することを避けるものであった。当時、武士の場合の「遠慮」は、門は閉じることが、夜中の目立たない時の出入は許され、伝染病人が出た場合は出勤、謁見を控えることであった。<sup>14)</sup> 香西豊子氏が指摘しているように、岩国では「疱瘡遠慮定」として制度化され、疱瘡の穢が周囲に及ばないよう、家臣の出仕停止や「疱瘡村」への退去を命じていた。<sup>15)</sup>

この浜中他一七人の集団以外の切込は、①元向：伊勢蔵、②白木河内：豊吉家内、③元向：弁助・代吉・利吉の個別事例である。①一二

月一七日、伊勢藏は、元向十内甥であり、十内家内は切込されており志岐・富岡方面へ避難していた。一六日小田床を経由し帰村したが狂乱状態のため、内野の勝三郎宅前で祓をしていた人々から追い立てられ峯へ行ったが、内野の者から伊勢藏は疱瘡病人なので近づくなと声を立てられた。十内宅に帰ると、今度は十内の女房に追い立てられ八幡土手へ行き、会所から人が出て山小屋に連れて行かれ疱瘡であることが判明した。そのため早速伊勢藏が通った道を祓った。

②二月二七日、白木河内の万右衛門伴豊吉妹のはるは、疱瘡を煩い白洲へ来たので山入となった。白洲は、海からしか近づけない山小屋のある外平へ行くための入口といえる。二九日、はるは富岡へ奉公稼をしており、二四日昼頃万右衛門宅へ来て打ち伏せ、その夜多七が来て追い立てたところ行方不明となった。二七日疱瘡出物があつたので、その夜じかに入山させた。そのため、豊吉と多七を切込か除小屋入にするよう白木河内中より相談があつたので、二四日夜から二七日までの居所を十分調査するよう指示したとある。その結果、豊吉家内は切込、多七は遠慮の措置となった。疱瘡病人との接触機会を調査した上で、その度合いによって、切込・遠慮と別の措置がとられている。

③三月一日、内野の栄七養母が疱瘡のため山入となる。翌二日元向の弁助・代吉・利吉は、栄七母が煩っている二月晦日夜、酒盛をしていたため切込となったが、聞き入れないため元向中より願い出があつた。村の年寄たちは切込しないならば除小屋へ入れると申し付けたとある。

②は疱瘡流行初期に発生しており、諏訪関連の伝染ではなく、富岡

方面から帰村後発症している。諏訪の疱瘡も常襲地帯の富岡付近から伝播した可能性もある。③は疱瘡病人の家での酒盛に対する措置で、切込しない対象者へ除小屋入も辞さないと強硬な態度を取っていることがわかる。

## 2-2 諏訪の支援物資提供者、清作・元藏・用吉

諏訪が中心となった疱瘡流行であつたが、諏訪全体の一二軒中疱瘡病人のいる家は三〇軒、全体の四分一であつた（二月二八日時点、史料②）。そのため諏訪内の三人からも支援物資が提供されており、最大は、正月四日唐芋二五〇斤、二月二日丁銀一九貫文を提供した清作である。唐芋は追中からの提供が多く個人では最大数であり、丁銀も個人では清作以外は一貫文以下であり、かなりの金額である。清作は所持高一五・七八石（文化一五年）と諏訪中最大であり、文化四年当時五二歳、女房と夫婦二人である。<sup>(16)</sup>文化九年正助と改名し、日記には正介・庄介等と登場する。文化七年一〇月五左衛門弟傳三（二二歳）が傳七と改名し清作家へ養子に入る。傳三は寛政二年彦四郎伴の茂四郎伴として登場し、寛政六年長平弟順助の甥となる。翌年には伴とあることから養子であるう。ただし文化一五年五左衛門家へ戻り、また正助夫妻のみとなる。

同じ二月二二日には、粃三俵を要吉、粃二俵を元藏が提供する。要吉は用吉・養吉と記され所持高一三・九四五石（文化一五年）と諏訪中第二位であり、文化四年当時五一歳、女房と夫婦二人である。元藏は所持高五・四五八石（文化一五年）と諏訪中三位、文化四年当時



五五歳、女房と娘四人、倅一人と七人家族である。実は、元蔵と清作は兄弟であり、寛政三年（一七九一）段階では元蔵が家頭、父甚七夫婦、元蔵夫婦、清作夫婦は同じ家族として把握されている。文化四年段階で清作は独立し家頭となっている。元蔵は文化七年死亡し、家督は倅徳十が継ぐが、徳十は文化八年祖父の名を継ぎ甚七となる。

諏訪の物資提供者三人は、諏訪の中で所持石高上位三位までの家であるが、迫の行政や経済にとっても重立層であった。疱瘡流行が収束した文化五年八月一九日、惣村中寄合で「ヲロシヤ一件手当」が申し渡された。「ヲロシヤ一件」とは、文化元年レザノフ来航以降、文化三、四年のロシア船による蝦夷地襲撃事件、文化五年のフエートン号事件などロシア等の脅威に対する、九州の東シナ海沿岸の異国船対策である。この手当の中で、「宰領方ニ召遣候人数」として「すわ清作 用吉 元蔵 伊作 彦衛門 源吉メ六人」の名が上がる。宰領とは一般の村民を指揮監督可能な者を意味しているが、そこに、疱瘡に対して支援助資を提供した三人もみえる。この六名の多くは、翌文化六年二月「異船渡来之節備手配并品々小前帳」にも主要人物として登場する。この備手配は「ヲロシヤ一件」関連の動員計画で村民を夫役担当として一五人一組を五色（青黄赤白黒）五旗に各七組、計三五組、五二五人に編成した。<sup>17)</sup>この各組は迫別に編成され、各組は小頭を置き、各旗に七組頭が任命された。諏訪は、黒旗で七組頭は用吉、亀組：用吉（兼任）、弓組：弁作、槍組：元蔵、鉄砲組：清作、鎗組：彦右衛門、長刀組：伊作であり、弁作以外は重複している。

先の三人を含めた六人は、迫の指導的立場であり、村の役職も勤め

る。文化六年八月二八日の役替で、元蔵は立会（百姓代）となるが、翌年正月八日死亡後、同二日伊作が元蔵に代わって百姓代を申し付けられている。また用吉は、寛政一一年六月一日百姓代、享和元年九月五日役替の際、五年限勤の定年寄となり、文化三年二月一六日八幡宮拝殿材木願の提出には年寄として登場する。

また、文化一三年閏八月一六日、文化四年の疱瘡流行で勸請した神島宮の祭を怠っているので宮を建立した上で祭をしないと、諏訪の彦右衛門・正介・用吉他五人の年寄中一同が相談に来たとある。<sup>18)</sup>この年寄中は村役人の年寄とは違い、迫の宿老的な位置づけと考えられるが、六人の内三人が重なる。<sup>19)</sup>

つぎに、経済活動として文化一三年閏八月一日には、富岡陣屋前稲荷社修覆の寄進帳に、村の寄進者名が列記される。銀一〇匁上田源太夫をはじめ、上田家持船順幸丸、問屋仲右衛門、船や土蔵を所有する新左衛門・善七など、稲荷社の祈願に関する商売関係の人物が並ぶ。<sup>20)</sup>そのなかで、正介は銀二五匁、用吉は銀二〇匁を寄進しており、同じく商売・経済活動に関与していたと思われる。

特に正介はつぎのように他村へも銭を貸している記事が多い。文化一三年二月二七日亀浦村庄屋倉田武左衛門が正介へ銀一五貫匁の借用を依頼したが断られ、宜珍に依頼が来ている。同年二月二日には今富村役座名で去冬借用した銀一〇貫匁と利一貫五〇〇目を正介に支払っている。十一月一八日には正介と小田床村与左衛門との訴訟で、元銭残四貫匁内三貫五〇〇目を請け取り、一件が終わったとある。

## 2-3 元藏家と文化六・七年疱瘡流行

文化四年の流行で諏訪内の支援者の一人であった元蔵は、文化七年疱瘡で亡くなった。前年の文化六年二月一日悴甚七が疱瘡を煩らい、晩に船で富岡へ養生させ、家内の者は「国方へ引除キ」とある。一六日、陶開屋すやが一〇日に元蔵宅へまんと同道して立ち寄っていたことが判明し、まんは諏訪中から切込したいと連絡があり、すやも夜前から切込となった。同じく弥左衛門も一〇日元蔵方へ泊まっていたため切込となった。文化四年には疱瘡に罹患しなかった元蔵家が発端の家になった。

一九日甚七は富岡町の宿へ依頼し養生していると風聞があった。二二日には富岡会所詰の又七郎から書状が届き、富岡町の疱瘡流行について「下タ町四町分出来町迄ハ不残相済、壺町田分三町目三分一相残居候処、當時至而心安ク正中ニハ惣町相済可申」と終焉見込みを知らせている。甚七についても、女房も煩ったが兩人ともに心安くしていると記されている。

翌文化七年正月七日、元蔵の弟清作から明日富岡宿平兵衛方へ、元蔵家内が養生しているので礼状と入用銭の借り替え依頼を出すご連絡があった。しかし一三日、元蔵家内は全員疱瘡となり、元蔵夫婦は死亡、他は快気した。そのため一五日元蔵方の疱瘡病人船・除船が三四日目で高浜へ戻り、一七日には元蔵宅が三七日目で口明した。二二日死亡した元蔵に代り伊作へ百姓代が申し付けられた。そして二三日、惣村中の初寄合で、元蔵家の疱瘡について、宜珍は以下のように見解を示す。

一旧冬元蔵家内疱瘡、峯に隠れ居候六部療治ニて、血ノ花ト申久敷隠置候ニ付方々へも散候様相成、去ル卯冬すわ慶助崩之節も右六部風呂ニ入旁致候而大変出来候ニ付、已来村方へ為立入不申候様峯分追立候由、此已後立入せ候者有之節ハ急度相替候段申渡ス

元蔵家の疱瘡は、峯迫に隠れていた六部から感染が拡大し、文化四年の慶助発端の疱瘡流行も六部から広がったので、以後六部の入村を禁じる通達であった。

元蔵家を継いだ甚七は、文化一二年七月二四日、まちに家を作るといつて偽ったことによりその不埒を咎められ、吉右衛門が中入し内済案件となった。甚七は内済金銀二〇〇目を差し出したがまちが不服を申し立て、吉右衛門は叔父である庄介（正助）を呼出し次の通り申し聞かせた。甚七は不埒の身持なので訴え出るのは難しく銭で内済する方がよい。このような不埒では甚七の家相続も難しく、甚七という祖父の名も取り上げ家督も庄介が預り、甚七が改心すれば引き渡すようにしっかりと異見すべきとある。しかし庄介も甚七も聞き入れず、八月六日内済しかけたが不調に終わった。一二日甚七女房が、甚七は勘当し居場所が不明と釈明したが、実際には異見した際に逃げ去ったと申し出た。この案件は富岡会所まで持ち込まれ、ようやく一〇月四日内済となった。元蔵は、甚七を養子とし、その後疱瘡で死亡し甚七が家頭となった。しかし、甚七という名前を取り上げられるほどの問題を起こしてしまう。甚七は自身が養父母の疱瘡死亡の契機となり、その

ことが影響しこのような一件につながった可能性もある。

## 2-4 他国養生の実態と天草墓

この元蔵家が発端となった文化六年の流行は、日別にまとめると次のようになる。①報告…一二月一日、元蔵家内、処置…他国養生・富岡、死者二名、関連…陶開屋すや・まん・弥左衛門切込、②一八日庵河内友蔵倅乙市六歳、友蔵死亡、他国養生・茂木、③二五日皿山和右衛門倅女房、浜林五郎娘、他国養生・大矢野・口之津、④二七日白木河内善吉女房、山入出来ず他国養生・志岐、⑤正月四日庵河内亀作母、次郎蔵倅、小渕河磯蔵女房、他国養生・為石、⑥七日西平源吉、死骸・妻子他国養生・薩州、⑦九日庵河内縄七倅、他国養生・富岡、⑧一三日富岡三丁宿平兵衛倅・藤吉娘死亡、⑨二五日諏訪弁作、他国養生である。元蔵の養生先である⑧を含めると九件、迫別では諏訪二・皿山・庵河内三・白木河内・西平と村内各所で散発的である。この疱瘡は、日記によると一二月二〇日御領村一〇人山入、正月三日志岐・富岡が旧冬から疱瘡流行、一四日富岡疱瘡九二一人内一四〇人死亡、現在患者が一〇人程残る、とあることから、富岡を中心とした流行で、正月中旬には収束したといえる。また、すべて他国養生であり、その場所が天草郡内の流行地の富岡二・志岐・大矢野、肥前の茂木・口之津・為石、そして薩摩と広範囲である。

この内、肥前国口之津の他国養生の一端が判明した。口之津がある長崎県南島原市には「天草墓」と呼ばれる墓が、南有馬向小屋約三〇基、菖蒲田約九〇基、口之津東約二〇基、合計一四〇基程が現存して

いるという。<sup>(21)</sup> 山下貞文氏の調査によると、この墓の時代は一八世紀の文化・文久期、地名は鬼池・御領・二江・大島子・上津浦・下津浦・赤崎・富岡・高浜村と、島原半島に面した天草郡北部沿岸を中心に高浜村まで存在する。天草墓は、天草の住人が埋葬されたもので疱瘡による墓と伝わっている。

その内の一基には「文化九年／諸精霊追善之塔／三月十五日／天草之住人於／病痲男女之墓」と、疱瘡と思われる記述がある。口之津の天草墓は、时期的にも文化期の流行と一致し、先ほどの③浜の林五郎が他国養生に行き口之津に滞在とあること、また文化五年正月六日、元向兵吉女房ますが疱瘡になった際、兵吉・母は口之津へ船で除く予定とあるように他国養生先の一つであった。これまで他国養生先での実態は不明であったが、死者は墓に葬られ、追善塔が作られていたことが判明した。文化五年の他国養生には、村から加勢銭が支給されているが、この資金をもとに疱瘡死者の墓が建立された可能性もある。他国養生に関する実態は、次の日記の記事からも判明する。正月一九日の宜珍から大江大庄屋への書状に、隣村大江村軍浦の字鯨堂に疱瘡死骸があり、高浜の疱瘡患者が疑われ、つぎのように記す。

当村々ハ万吉ト申子ども老人参候事ニ付、右体軍浦へ仕向候事ハ決而有之間敷歟ト奉存候、是又妻子共も付添居候ニ付捨置候様成儀ハ以猶為致間敷ト相考申候、庵河内疱瘡病人相果候ハ六十才程之女ニて御ざ候、其餘ハ子供ニて軽々相見へ他国へ参候儀相違無御座候、是ハ去ル四日夜ニて御座候

書状には他国養生の病人には妻子が付き添い捨て置くことはない、その他軽い症状の子供を他国養生させていると反論している。

二三日、惣村中の初寄合では、「疱瘡病人他国へ差遣候、難儀者之分ニハ相応加勢之事」と、他国養生者への支援を伝えている。二月七日、宜珍から富岡会所詰伊野又七郎へ、富岡町方の疱瘡流行終焉の連絡や、高浜村の者が町方や肥前茂木で養生した際に世話になった札状を送付している。三月八日、六〇日ほどたった、疱瘡看病人、付添者五人が帰村し、大河内の十五社に籠ると申し出たが、富岡を二月二四・五日頃出て、郡中を回っていたと伝えており、これらも他国養生の実態といえる。

### 3 疱瘡流行の家・家族への影響

#### 3-1 宗門改帳の家・家族

つぎに3では、疱瘡流行の影響について、同時期の宗門改帳を利用し家や家族の構成の変化から考えてみたい。<sup>(22)</sup> まず宗門改帳の史料概要、記載内容、改名、家頭と別宅人、人の移動・家の更新など、その特徴を指摘する。

高浜村には、明和七年（二七七〇）から慶応二年（一八六六）まで、長期間にわたる宗門改帳が現存する。<sup>(23)</sup> ただし現存する宗門改帳は各年の一部であり、表紙に「壺」とあること、文化五年四月二日日記に「宗門二番帳奥書」とあることから一、二番帳があった。時期によって冊数は変わるが、文化二年天草崩で異宗回信者が分冊されて以降、宗

門御改踏絵帳三冊（文化一四年三月二日）となり、内訳は、踏絵帳禪家之分、大一冊、同真宗分、小一冊、同異宗回信分同一冊（文化一二年三月二四日）であったと思われる<sup>(24)</sup>。表題は、天草郡が文化一〇年に島原藩預から長崎代官支配となったため、文化一〇年「西歳宗旨御改影踏帳」から文化一二年「宗門御改踏絵帳」に変更している。

また同じ「壺」の宗門改帳でも収録家数が変化しており、対象とする文化期は、文化元～三年が撮影画像一三八～一五一コマなのに対して、文化四年四〇八コマとなり、以降四〇〇コマ前後と収録家数が増加している。<sup>(25)</sup> 宗門改帳には庄屋上田家を筆頭とし、庄屋家が所属する迫から記載されている。しかし、文化四年以降、今回対象となる諏訪迫の大部分が含まれ、疱瘡流行の影響の分析が可能となった。

記載事項は、家別に家頭を筆頭として各人の名前・続柄・年齢、生死や移動、家族数の合計である。文化期の内、文化一五年の宗門改帳のみ所持高が記載される。文化一二年には所持高記載がなく、文化一三・一四年は欠年のため、いずれの時期からはじまったかは不明である。<sup>(26)</sup> また特徴として、男性の改名の多さがあげられ、文化九年には、金作↓金五郎、与四郎↓喜曾五郎、清作↓正助、与四郎↓繁兵衛、伊作↓四郎右衛門、亀作↓仁平、久太郎↓米吉、作平↓佐平次、用作↓用平、伊作↓喜三右衛門、熊之助↓恵四郎、三之助↓要八・平助、四郎作↓四郎七、伝五郎↓佐五郎の一四件の改名がある。同名の与四郎、伊作が二件あり間違いを避けるために改名した事例もあるが、三之助のように二度改名している場合もある。

改名に関して、天保五年（一八三四）二月の触には、各村の宗門改



の際、村人の名前を呼び出して踏絵を行うが、宗門改帳の名前と実際の名前が相違しているため一致させるよう指示している。<sup>(27)</sup> また弘化四年（一八四七）六月の触では、村から提出される諸願書・届書の名前や年齢が、宗門改帳と相違しており、行政が煩雑となるため改善を要求している。<sup>(28)</sup> 改名と宗門改帳の名前の不一致の問題は、その後も継続していることがわかる。

宗門改帳と比較対象とする疱瘡関係文書は、②文化四年「諏訪之通家数人高相改疱瘡病人仕訳帳并外場所病人共」である。この史料は、先述したとおり諏訪全戸の家別の人数が出ており、諏訪迫の確定が可能である。ただこの文書では家頭以外に別宅人が記載されているが、宗門改帳は別宅人の記載がない。比較すると、②諏訪全体一二三軒中、家頭八七軒、別宅人三五軒（後家二軒含）と記載されるが、文化四年宗門改帳では、家頭八二軒（伊作・太郎吉・一三軒、家頭五軒分未確認）になっている。例えば、宗門改帳の家頭次助家は一三人であるが、②の場合、家頭次助五人、別宅人重太郎（次助兄）三人、五八後家とめ（次助姪）五人の三軒に分割されている。<sup>(29)</sup>

つぎに、人の移動・家の更新に関しては、①別家人、②替門、③新門に分類できる。①の別家人は「太郎作令入」「貞作へ入」など、婚姻・養子などの場合である。②替門は、家頭交代の場合、家族内の別の継承者が「門出」して家頭となる。③新門は家頭以外の男子が新たに別家となった場合である。今回対象とする疱瘡の場合、家頭が死亡し継承者がいる場合は替門、家頭となる継承者がいない場合、別家人となり、他家へ統合される。この「新門」は「分竈」「竈分」とも呼ばれ

ており、文政五年（一八二二）正月二六日日記では、「宗門帳ニ嫡子・二男・三男・分家・分竈と申義相認候様被仰付」と代官より記載の指示が出たが、提出まで日がなく来年以降の措置となった。分竈とは兄弟を分け改めると書かれている。天保五年二月の触には、六七年以前に、竈分したものは家頭を立てるよう指示したが家頭を立てない村があり、宗門改や取り調べに支障が出るので今後実施するよう指示が出ている。<sup>(30)</sup>

### 3-2 家頭死亡後の家の展開

つぎに文化四年疱瘡流行で、家頭が死亡した場合の家の変化・展開について、①家頭死亡後、替門、②絶家と疱瘡疑惑の事例をみていきたい。家頭が死去した家は、「諏訪之通疱瘡病人山小屋入并除小屋入書立帳」「疱瘡病人数御届申上候小前書立帳」、文化四年の宗門改帳の照合から、慶助家を含めて一四軒となる（表2）。このうち、替門一〇軒、別家人三軒、絶家一軒と替門が多い。以下の事例では、①替門、②絶家、③④別家人となる。

#### ①慶助家と親類 発端の家と替門

まず疱瘡流行の発端となった慶助は、文化四年宗門改帳では「敬助」とあり五六歳、女房かめ五五、伴友五郎一七、娘なつ一九、伴此助二六、孫和五郎三、姫こめ二六歳、七人家族である。慶助は一月二八日に死亡しており、一月二五日山入したのは、女房かめを除く五人で、その内孫和五郎が二月二四日に死亡した。女房かめが一番近い

表2 文化4年疱瘡で死亡した家頭

	家頭名	状況	分類
1	伊代作	死、替門伊作	替門
2	甚之丞	死、替門熊之助	替門
3	慶助	死、替門此助	替門
4	只藏	死、替門五郎	替門
5	伝助	死、替門幸太郎	替門
6	市兵衛	死、替門三之助	替門
7	儀七	死、替門万吉	替門
8	作兵衛	死、替門祐右衛門	替門
9	七兵衛	死、替門六太	替門
10	伊代平	死伊予平、替門喜太郎	替門
11	太郎作	死、貞作へ入	別家入
12	伊代吉	死、只兵衛へ入	別家入
13	折助	死、傳三郎へ入	別家入
14	福平	死	絶家

出典：文化4年「卯歳宗旨御改影踏帳」（上田家文書 7-23）

接触者と思われるが除小屋入であり、既罹患者であった可能性が高い。慶助家は七人中二人が死亡し、忤此助に替門され家頭交代となった。

一二月一二日日記に、慶助家に身近で立寄った者二軒二〇人が打ち臥せ、その内四人が出物があり疱瘡と判断された。その四人は平蔵（慶助弟）、慶蔵（同人甥）、幸十（伝助忤）、伊与平（慶助従弟）である。

平蔵は、安永九年（一七八〇）慶助弟与五郎とあり、天明六年（二七八六）平蔵と改名しており、寛政六年（二七九四）弥助娘さんの婿とあり夫婦であった。文化四年平蔵四七、忤末松一二、忤文次一二、娘かん八、女房さん四八、忤作十一五、娘たつ一六歳の七人家族である。一二月一四日全員が山入し、その内、娘かん、女房さんが

死亡した。

慶蔵は、慶助の甥、文化四年敬蔵三三、娘みね四、女房せん三四歳の三人家族で、一二月一五日全員が山入し、その内、娘みねが死亡した。二年後には吉太郎が生まれている。幸十は伝助忤とあり伝助家は五人全員山入し、家頭伝助六三、孫こめ六歳の二人が死亡した。慶助従弟にあたる伊与平家は一〇人中、伊与平四四、女房ふく四一、権太郎一一歳が一二月一五日に山入し、他七人は除小屋入となり、伊与平のみ死亡した。また慶助弟の儀七家は、女房さつを除く、儀七と忤娘八人の計九人が一二月一五日に山入し、儀七四五歳、忤三治一二、娘いぬ一八、娘むめ四歳の四人が死亡している。慶助から直接感染した親類五家の内、慶助・伊与平・儀七の三人の家頭が死亡し、いずれも忤に替門した。

## ② 福平家 絶家と疱瘡疑惑

つぎの福平家は、唯一家族六人全員が死亡し絶家した家である。山入の月日がずれており、まず一二月一七日娘のたま七、いわ一一歳、その内たまは山入の日に死亡した。同時に家族全員が除小屋入した。つぎに福平四六歳が二五日、女房はる三八、娘かち九、いぬ二歳が正月一、二日とあり、ほぼ同時といえる。死亡は、娘かちが正月五日、いぬが六日とほぼ同時、福平が八日、いわが二二日、はる二九日である。感染経路として、娘二人から感染し、福平、女房と娘に拡大していく様子が判明する。福平には、幾兵衛五三歳、宇左衛門六一歳、乙松四六歳の三兄弟がおり合計一八人いるが、他に疱瘡に感染したのは、

宇左衛門家三人のみで、無事に回復しているので福平家のみ被害といえる。

この福平家に関連するのが、つぎの正月二三日加兵衛の疱瘡疑惑である。

一 諏訪之通加兵衛九十四才二而五六日相煩候相果候二付如何之病氣二候哉源藏廣作遣為見候処、老病二而相果候と見請、少も心遣之病二て無之段申出候得共、親類中も諏訪中ヲ嫌候而葬方ニハ煩致候者共計遣候筈二候由申出候処、内野分藤内丸へ葬候義相嫌候段申出候二付、如何可致哉之段会所分伺出候、諏訪小崎之用吉畑之上ニ相葬候様申付遣ス

右之通申付候処、夕浦墓所ニ葬候様、親類中も立会候段申出候由、会所分届出ル

この記事では、加兵衛九四歳が病名不明で死亡し、源藏がみて老病であり疱瘡ではないと判断した。しかし親類は疱瘡流行中の諏訪を嫌って葬式には疱瘡既罹患者のみ参加し、墓も通常とは違う諏訪内の土地に葬ったとある。加兵衛は文化四年には嘉兵衛、乙松四六歳の父であった。福平は六平として明和七年加兵衛忤として登場し、乙松の兄でもあった。日記には詳しく記されていないが、福平家の全員の罹患、山入をみた親類などが加兵衛も疱瘡なのではないかと疑心暗鬼になったのではないかと考えられる。

### 3―3 女性と疱瘡

最後に、疱瘡の影響を受けた女性の実態を、③他家を転々と移動、④他家で再婚、⑤罹患二度目の母、別家記載の妻の事例からみていきたい。

#### ③ 太郎作家 別家入、他家を移動

太郎作家は七人家族であったが、家頭・女房が死亡し、娘・忤・姉のみとなり別家に吸収された事例である。まず太郎作五〇歳が一月二日山入とあり、その日死亡している。家族五人も除小屋入し、女房たみ四二、娘おと四歳が六日山入、女房は八日死亡、娘たつ一二、娘かや一三歳は一三日山入、一六日、二二日に死亡している。除小屋のまま疱瘡を発症しなかったのは忤と四松九歳で、姉なつ五四歳は山入しなかった。

そのため疱瘡収束後生き残ったのは、おと、与四松、なつであったが、与四松は五月三〇日に死亡した。この家は1―5で先述した極難儀者とされ錢二五〇目を受けている。姉なつは、太郎作の兄虎平の女房であり、太郎作も虎平家にいたが、寛政元年（一七八九）虎平死亡により太郎作が家頭となる。

残されたおとなつは貞作家へ入る。貞作家は貞作六五歳夫婦二人、忤家族四人、従弟五人に、おと・なつが加わり一三人家族となる。貞作は惣作の弟、惣作死亡後次平の伯父として同家にいたが、寛政二二年弟の庄作が分家し、文化四年には、貞作も分家しており、次平家も第三之助家となり、惣作家は三家となった。その後、おと・なつは

文化一〇年まで貞作（貞兵衛と改名）家で従弟として記載され、文化一一年なつのみ六助家へ移る。おとは翌一二年まで貞兵衛家におり、同一五年弥五平が貞兵衛家を継承したが、おとは消えている。六助家は八人家族、なつは従弟として記録され、文政二年宗門改帳には六六歳、病とあるが、文政三年正月小田床村勘吉方へ引越している。

なつと同時に文化一一年庄吉家の家族三人も従弟として六助家へ入る。庄吉は文化一一年一〇月二二日死亡しており、その後、娘とら三六、孫いち二〇、孫しか六歳が六助家へ移った。庄吉家は六助の次に記載されており、親類の可能性が高いが、なつの関係は不明である。なつは夫虎平死亡後、弟家族と暮らし、文化四年の疱瘡流行で弟家族が死亡し、一人残った姪と貞作家へ移り、その後一人で六助家へ移り、最後は村外の小田床村へ引越していった。その後の消息は不明であるが、転々と家を移り疱瘡の影響を大きく受けた一人といえる。

#### ④安五郎家 他家へ再婚

安五郎家は家頭四六、娘みつ八、忤寅松四、女房いと三五、娘たつ一二歳の五人家族であったが、全員一月一四日山人となり、安五郎が二三日に死亡した。先述の極難儀者とされ麦一斗五升、塩一斗、錢二五〇目を受けている。残されたみつ・寅松・いと・たつは、五郎家へ移る。五郎家には五郎五四、従弟のふゆ一八、はる二一、乙松二九歳の四人がおり、計八人となる。しかし文化七年、ふゆ・はるが三左衛門へ、みつ・寅松・いと・たつが幸藏家へ移り、乙松と二人となった。文化九年二月二八日乙松（おと）は急死し五郎一人となる。幸藏

家でいとは女房とあるので再婚し、ためという娘も生まれ、文政三年まで確認できる。

幸藏は、明和七年権七の忤四歳として登場、安永四年兵右衛門家に移り甥となる。安永九年武右衛門家へ移り忤とあることから養子となった。寛政元年武右衛門従弟四郎右衛門忤の甚之丞家に義父武右衛門と一緒に従弟として移り、文化四年甚之丞が疱瘡で死亡したため、一時家頭となった。そして文化五年甚之丞家は用助が家頭となり、文化六年一人となったが、翌年いとと再婚し改名し幸藏となった。

#### ⑤三五郎家 罹患二度目の母、別家記載の妻

第二波である二月の流行は、一七日諏訪の與作・妻・忤が疱瘡となり山入したのが最初であるが、つぎの通り與作の母が発端となった。

#### 以書付御届申上御事

当村諏訪之通疱瘡先月中相治、療治方も相済候二付、医師賢育当月十四日在所宇土江為引取安心罷在候処、又々諏訪之通與作母三拾四年已前疱瘡相煩候ト申、此度疱瘡出来候家之番ニ暫ク参居、與作方江引取候上煩付出物仕候得共、元来疱瘡仕候もの之事故、何之氣付も無御座、近辺之者共出入等仕罷在候処、與作并女房忤も無程打臥、段々出物仕候段申出候二付、村方今見せ二遣候処、何れも疱瘡ニ而当月十七日山小屋江差遣候処、同廿日同人隣家忤軒ニ男二人女二人相煩、同廿二日同断忤軒ニ男老人相煩、都合九人其時々山小屋へ差遣申候、尤賢育在所へ引取候跡之義故、最



初山小屋為見ケメ遣候徳助式番小屋江罷在候を又々本小屋江立戻り、養生方世話仕候様申付差遣置申候、右二付與作方江出入仕候近辺之者共家数廿軒、除山へ差遣跡用心之義精々入念取斗申候、依之此段御届申上候、已上

辰二月

高浜村庄屋上田源作

富岡御役所

與作の母は三四年以前疱瘡に罹患していたので疱瘡で山入している家の番に行った。與作家へ帰宅後、出物がでたが気にせずにいると、與作・女房・忤が疱瘡となり山小屋入となった。二〇日隣家も煩い感染が拡大したとある。以前疱瘡に罹患した者は疱瘡にかからないという常識を外れた感染であった。與作は③「諏訪之通疱瘡相煩極難儀者」では「与作三五郎事」とあり、三五郎と母は快気したが、女房たつと忤甚太郎は死亡した。三五郎家は他に伯母とめ七八、妹はる一六歳があり、六人家族中四人罹患し二人死亡となった。極難儀者とされ麦二斗、塩一斗、錢一〇〇目、米一俵を受けている。

このとき隣家で感染した熊之助家は、家頭熊之助三五、女房ゆき三五、妹さん二三歳の三人が二月二〇日山入し死亡した。この他、除小屋入は三人であった。文化四年の宗門改帳では、熊之助三五、母つま五八、弟寅松三三、妹さん二三歳の四人である。女房ゆきは確認できないが、寅藏家に寅藏妹として登録され、文化四年には「すハ熊之助女房二月一九日山入」と貼札があり、文化五年三月二日急死と記録され、熊之助女房で間違いない。女房ゆきは実家に登録されているが、

夫熊之助と共に疱瘡に罹患しているので実際には同居している可能性が高い。

熊之助家は極難儀者とされ錢一〇〇目、粃二俵を受けている。その後弟寅松が家頭となり、文化五年には忤安太郎が登場するが女房はいない。文化七年には安兵衛と改名し、沓町田村権之丞方から女房いろ・伯母ちよが移っている。熊之助の女房は同居していたと思われるが、宗門改帳では実家に登録され、寅松は兄熊之助が死亡後、家頭となり忤が生まれた後女房が登録されている。

おわりに

これまで三章にわたり、肥後国天草郡高浜村の文化四・五年の疱瘡流行が村社会・地域に与えた影響と実態、特に迫や家・人に注目し分析を行った。1では疱瘡流行期に作成された文書を精査し、迫全戸の状況や難儀者などを明らかにし、2では切込・遠慮・他国養生の対象となった家、支援助資提供者の実態、3では文化期の宗門改帳から疱瘡死による家族の構成の変化・影響、特に家頭の死亡と女性に焦点をあてて分析した。そこで判明した二つの論点を示したい。

まず疱瘡罹患者の世代と社会への影響である。香西豊子氏は、近世中期の「都会」の疱瘡は、死亡率の低い小児のはやり病に押しとどめ、飼いならしていた。また「都会」では常にどこかに罹患者がおり、「辺鄙」では数年に一度流行に見舞われ、類型が登場し、各地で疱瘡への対処法を巡る政治的な判断があったとされる。<sup>(31)</sup>そして渡辺理絵氏は、事例の蓄積が必要とした上で、近世農村地域で疱瘡流行の周期性があ

り、罹患者の大半は一〇歳以下であることを示唆している。<sup>(32)</sup>このように近世各地ではほ子供病と化した疱瘡の社会への影響は人口減少などであった。「辺鄙」「無痘地」と位置づけられる天草郡高浜村では、一〇歳以下は病人全体の二五%、二〇代を含めても四九%と全体の半分程度である。半数を占める三〇代以上の特徴は、発端となった人物の年齢と世代交流の影響がみられた。この世代に多い家頭の死去は家の継承や難渋者の増加につながる。また、奉公先での感染、酒宴や宿泊など接触機会の多様化・広範囲化、治療を受けた六部の排除や高齢者死亡の疱瘡感染疑惑の発生、養子が養父母を感染死させ、その後に起こした内済一件など精神的影響等、数多くの問題が発生した。これらの問題は、様々な形で村社会へ影響を与えており、全国的に普及した子供病段階ではみられない現象ともいえる。成人を含めた多世代の疱瘡罹患者が抱える問題は、様々なパンデミックの事例、特にはじめで感染拡大した今回の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)とも比較が可能である。

つぎに、家族の構成の変化への対応、柔軟な家認識の存在である。疱瘡流行による家頭死亡は一四軒存在するが、その内絶家となったのは一軒のみである。ほぼ家族内の男子が替門で継承し、その他は別家入で他家へ吸収されていた。また、別家入し家頭と再婚し家族を形成した事例もあった。そして疱瘡では把握された別宅人や罹患した夫婦であっても、宗門改帳には把握されず、妻が実家に記載されるなどの史料間の把握の相違があった。これらの相違はすでに各地の事例で指摘されており、平井晶子氏は、宗門改帳の記載形式に関して、一八世

紀末頃、家族へのまなざしが変わったこと、広範囲に「家」的家族観が一般化したと指摘している。<sup>(33)</sup>高浜村における、この柔軟な家認識は、家の統合・分離・吸収を行い絶家を回避し、全体的に各家の存続と村の人口維持に寄与したといえる。それは、家頭を失った家に対して、難渋者と認定し経済的な支援を行ったことからあきらかである。前稿では村、本稿では村内の迫や家・人に焦点をあてて分析した。今後は、疱瘡が近隣の村や郡内の地域社会に与えた影響について分析したい。

追記 上田家文書の閲覧に際して上田陶石合資会社、岩下邦明所長、田中光徳氏には御高配を賜った。南島原市における天草墓に関しては、山下貞文氏に貴重な情報を提供いただいた。また宗門改帳の記載事項に関しては、「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」(研究代表者速水融、一九九五―一九九九年)、麗澤大学「麗澤アーカイブズ」のデータを利用した。ここに記して感謝申し上げたい。なお本稿は、二〇二〇年度日本学術振興会：課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業(領域開拓プログラム(研究テーマ公募型))「パンデミックの歴史研究に基づいたポストパンデミックの社会・環境理論の構築」(研究代表者藤原辰史)の研究成果の一部である。

(二〇二一年一〇月一日受理)  
(ひがし のぼる 文学部准教授)

(1) 上田家文書は、庄屋家の子孫にあたる上田陶石合資会社（熊本県天草市）が所蔵する。なお文書目録は天草町教育委員会編『天草町上田家文書目録』（一九九六年）がある。以下上田家文書を引用する場合には文書番号を記す。

(2) 香西豊子『種痘という〈衛生〉 近世日本における予防接種の歴史』東京大学出版会、二〇一九年、一三〇～一三三頁。

(3) 青木歳幸・大島明秀・W・ミヒエル編『天然痘との闘い 九州の種痘』岩田書院、二〇一八年、二六三～二七二頁。

(4) 渡辺理絵「近世農村社会における天然痘の伝播過程―出羽国中津川郷を事例として―」『地理学評論』八三巻三号、二〇一〇年、二四八～二六九頁。

(5) 川口洋「牛痘種痘法導入期の武蔵国多摩郡における疱瘡における疾病災害」『歴史地理学』四三―一、二〇〇一年、四七～六四頁。

(6) 東昇「近世肥後国天草における疱瘡対策―山小屋と他国養生―」『京都府立大学学術報告（人文・社会）』六一、二〇〇九年、一四三～一六〇頁、改稿「村の疱瘡対策と地域情報の記録」同『近世の村と地域情報』、吉川弘文館、二〇一六年。

(7) 東昇「近世村落行政における地域情報と庄屋日記―肥後国天草郡高浜村上田家を事例に―」松原弘宣・水本邦彦編『日本史における情報伝達』創風社出版、二〇一二年、一八八～二三三頁、改稿「地域情報の記録と情報化―日記・文書―」『近世の村と地域情報』。

(8) Satoshi Murayama, Noboru Higashi Seashore Villages in Amakusa... Takahama and Sakitsu. A Comparative Study of Population Registers

and Disaster Management in the 19th Century, Kyushu, Japan. *Popolazione e Storia*, No. 1/110111

(9) 元・中向・宮ノ前（以上「浜」と称す）・峯・松下・諏訪・内野・庵河内・皿山・大河内・白木河内・上河内・大野・西平である（上田家文書七―一〇四、慶応二年三月「五人組合家別帳」）。

(10) 上田家文書四―三「高浜村明細帳」。

(11) 所蔵別に上田家文書（上田陶石合資会社所蔵）五―二七八①、二七九⑤、二八〇③、檜垣文庫（九州大学附属図書館記録資料館所蔵）二五二―八②、九④。

(12) 『天草郡高浜村庄屋 上田宜珍日記』寛政五～文化一五年、全二〇巻、天草町教育委員会、一九八五～一九九八年。本文中に記載のない年月日史料の典拠については、上田宜珍日記であり、各年の該当月日を参照いただきたい。

(13) 上田家文書七―二三、文化四年「卯歳宗旨御改影踏帳」。

(14) 「遠慮」『日本国語大辞典』、ジャパンナレッジ版。

(15) 前掲、香西豊子『種痘という〈衛生〉 近世日本における予防接種の歴史』二二〇～二二三頁。

(16) 文化一五年「宗門御改踏絵帳」（上田家文書七―三二）。

(17) 前掲、東昇『近世の村と地域情報』二三五頁。

(18) 前掲、東昇『近世の村と地域情報』一九三頁。

(19) 前掲、東昇『近世の村と地域情報』一〇九頁。

(20) 東昇「肥後国天草における人・物の移動―旅人改帳・往来請負帳の分析―」『日本研究』二八、国際日本文化研究センター、二〇〇四年、

二九九～三二二頁。

(21)調査・銘文・写真などは、山下貞文氏（南島原市文化財保護審議会委員）の提供による。このような追善・供養塔は同時期の天草でも確認できる。上田家の庄屋日記によると高浜村では、寛政四年（一七九二）四月～五月に島原大變の流死人が数多く流れ着き戒名をつけて埋葬した。翌五年四月朔日に一回忌の供養を開始し、同九年五月一日村寄合で庄屋上田宜珍は、「嶋原大變二付、流死人来午年七年忌二相当候間、当年中石塔建置申度」と、七回忌に向けて石塔建立について計画を披露した。翌一〇年、流死人を供養した海会塔が建立され、村の隣峰庵住持により供養された。その後、文政七年（一八二四）四月朔日には三三回忌が実施されるなど長期にわたる。対岸の地域で非業の死者を供養している様子がわかる。

(22)なお宗門改帳の記載データは、旧文部省創成的基礎研究費「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究（ユーラシアプロジェクト）」（研究代表者速水融、一九九五～一九九九年）においてデータベース化されている。本データは現在、麗澤大学「麗澤アーカイブズ」所蔵である。このデータと原本画像を照合して利用した。

(23)上田家文書七一～七五。

(24)東昇「文化二年「天草崩れ」と宗門改帳―肥後国天草郡崎津村文書を中心に―」『京都府立大学学術報告（人文・社会）』六〇、二〇〇八年、六九～八四頁。

(25)上田家文書七一～三二。

(26)崎津村の文化一四年「異宗回信之者絵踏帳」（崎津村文書二五、九州

大学附属図書館記録資料館九州文化史資料部門所蔵）にも石高記載はない。

(27)本渡市教育委員会『天領天草大庄屋木山家文書 御用触写帳』四、一九九九年、二〇七～二〇八頁。

(28)本渡市教育委員会『天領天草大庄屋木山家文書 御用触写帳』五、二〇〇〇年、一一四頁。

(29)高浜村の宗門改帳における家族の把握の変化について、村山聡氏は文化二年天草崩れの取調が契機となったと指摘している（村山聡「海の支配と隠れキリシタン」落合恵美子編著『徳川日本の家族と地域性―歴史人口学との対話―』ミネルヴァ書房、二〇一五年、二一七～二四一頁）。

(30)本渡市教育委員会『天領天草大庄屋木山家文書 御用触写帳』四、二〇七～二〇八頁。

(31)前掲、香西豊子『種痘という（衛生） 近世日本における予防接種の歴史』九四頁、一三八、一三九頁。

(32)前掲、渡辺理絵「近世農村社会における天然痘の伝播過程―出羽国中津川郷を事例として―」二六四頁。

(33)平井晶子「宗門人別改帳の記載形式―記載された家族を読む―」前掲、落合恵美子編著『徳川日本の家族と地域性―歴史人口学との対話―』四五二頁。